

[演題 9]

社会的養護における「養育の連続性」の 保障に関する一考察 ～乳児院から児童養護施設への措置変更プロセスを中心に～

石田 賀奈子

神戸学院大学総合リハビリテーション学部 社会リハビリテーション学科

1. 研究の背景

社会情勢の変化, 地域社会の変化などを背景に, 社会的養護を必要とする子どもや家族のニーズも変遷を遂げてきた. 多くの入所児童に保護者がいる情勢を受け, 乳児院においては1999 (平成11) 年より, 児童養護施設においては2004 (平成16) 年より, 家庭復帰に向けた家族関係調整を担う専門職として家庭支援専門相談員 (ファミリーソーシャルワーカー: FSW) が配置されるようになった.

乳児院においては, 0歳から2歳までの児童の養育を基本としている. 家庭復帰率はこの10年で10%近く低下しており, 2010年度の家庭復帰率は55.4%となっている. 残りの44.6%の児童は, 児童養護施設, 障害児施設, 里親委託等, 引き続き社会的養護を受ける状況にある. 乳児院入所によって親子分離を経験している乳幼児は, 分離に対する不安を強くもっている. 措置変更は, 乳児院の担当職員との愛着関係から離れて新たな人間関係を構築しなければならないという課題をともなうものである. その別れの体験が深刻な喪失体験やトラウマ体験とならないような手続きが必要である.

2. 研究方法

乳児院職員および児童養護施設職員を対象にインタビューを行った. 調査期間は2014年9月から2014年10月までである. A県A市に所在する乳児院2施設, 児童養護施設1施設の職員から協力を得た. 家庭支援専門相談員, 里親支援専門相談員, 主任保育士等8名に調査協力を得た. ①乳児院から児童養護施設への措置変更の手続きの現状, ②措置変更について課題だと思われる点, ③措置変更時に大切にされている点の3点を中心にヒアリングを行った. 得られたデータは, SCAT (大谷2007) およびKJ法 (川喜田 1986) を参考に分析した. 具体的には, ①収集したデータから措置変更時の支援に関する語りを抽出(セグメント化)する, ②SCATに基づく4ステップ・コーディング (各セグメントから浮かび上がる構成概念の抽出) を行う, ③浮かび上がった構成概念を, KJ法を参考にカテゴリー化する, という手順で分析した.

3. 結果と考察

インタビューの結果, 措置変更においては単に児童の生活の場所が変更するという意味付けに終わらず, 乳児院, 児童養護施設, 児童相談所, 保護者の四者で話し合いを持ち, 引き取りに向けて

の課題の見直しを行うなど、ソーシャルワークのプロセスにおいて重要な局面として位置づけようとする現状が明らかとなった。しかし、乳児院においては児童に関する詳細な引き継ぎ書類を作成し、思いを込めて新しい生活の場所へ送っていきたいと感じているが、児童養護施設の側においては、職員配置の厳しさなどを背景に、十分に書類に目を通す暇がなく、また「児童が新生活に慣れること」を優先し、養育の連続性や愛着対象との関係の継続については意識を向けにくい傾向にあることが示唆された。どのような場合も児童本人の最善を中心に据えた専門職連携のもと、安心して安全な環境の中で児童が確かな信頼関係を持てる大人とのかかわりを継続していくことがなにより大切にされるシステムの在り方が今後検討され、浸透していく必要がある。